

2019年度卒業生 スイッチ

豊田高専の入試。午前中が終わって彼の心の中は真っ暗だった。点を取るべき数学と理科が思うようにできなかったのだ。「やばい・・・。」お弁当を食べながら泣きそうになった。いつものおいしさ。いろいろなことが思い起こされた。ずっと明るく支え、応援してくれたお母さん、仕事で忙しい中、最後の最後まで自分を信じて伴走してくれたお父さん、いつも温かい笑顔を向けてくれた妹、そして何よりこれまで頑張ってきた自分自身。「ダメだ！このままでは帰れるわけがないだろ！！」カチッとスイッチが入り、全身にこれまでにない大きな火が着いた。

新しい事を学ぶことは本来大好きで、知的好奇心旺盛の T 君。ただ、塾にやって来たのはお母さんに連れられてなんとなく・・・の印象だった。「勉強で少しでも上位を目指したい。」とか、「人に負けたくない。」とか、「〇〇高校に行きたい。」とか明白な目標があったわけではない。彼の基準は自分の心なのだ。当時、本人に自覚は無かっただろうが、知らないことを知る—そんな面白いことを追求して生きていきたいと望む気持ちが既に彼の中には芽生えていた。

勉強に限らずスポーツでも芸事でも、何か大成させようとするならば基礎力をつけることは不可欠である。スポーツならば足腰鍛錬、勉強で言えばもちろん読み、書き、計算の力である。しかし、残念なことに、彼はこの中の「書き」が大の苦手であった。丁寧に書こうとすると他の人以上に時間がかかってしまう。急いで書くと字が暴れる。気の毒に思えたが、定期テストや先々の受験のことまで考え、提出物に関しては容赦せず判別不明の字は全て書き直させた。

限界が来たのは中2の秋。それまで辛いながらも続けてきたが、ついにリタイア。休塾となった。だが、この休塾が彼を成長させた。授業を聞いて“わかる”だけでは点に結びつかない。今までやらされてきた英作や数学の問題演習がいかに大切であったかということ、そして、それを学校よりも先取りしながら進めていくだけの計画性と実行力が今の自分にはまだないということに気付いたのだ。この素直さも美德である。戻ってからの彼は明らかに変わった。どのプリントも全て精一杯丁寧に仕上げてる。塾に通う意味が心底わかって、元々の理解力の良さに磨きがかかり、塾での学びの一つ一つがしみこんでいった。彼が本気で難関の豊田高専電気・電子科を目指し始めたのもこの頃である。中学校では学年一桁を続けるも、十分とはいえない内申での受験であったが、自分を伸ばしてくれる高校、そして夢に近づけてくれる高校として目指し、最後まで走り切った。第一志望学科への合格、春日井からは彼一人だけだった。

「先生、高専楽しいです！」自分で入れたスイッチ。穏やかな笑顔の奥で今も炎は燃えている。